

本日の学び:「初穂となられたキリスト」 テキスト:第一コリント15章12-22節

【理解の手がかりとして】

今課のテキストの小見出しには「死者の復活」とある。「死者の復活」とは罪の結果として死にいく存在（滅びへ）と定められた人間が（15:21-22）、救われて永遠の命へと結び付けられる事、これが「死者の復活」が指す内容である。

ここで押さえておくべきことは、コリント教会の信徒たちは、イエス・キリストの復活を決して否定しているのではない、ということ。彼らが否定しているのはあくまで「死者の復活」である。では、何を彼らは否定していたのか、そのことを明らかにしたい。

コリント人に大きく影響を与えていたギリシャ哲学、その思想には「魂の不死」という概念が強くあった。これだけとれば、キリスト教の「永遠の命」という信仰概念と同じもののように聞こえる。しかしそれは似て非なるものである。ギリシャ哲学の言う「魂の不死」とは、肉体の消滅、その完全な解体（死）による魂の解放であった。しかもその魂はその本体である神のもとに吸収される、というものであった。するとそこには人間個々の魂の永続というものはありえない。その思想の上で、コリント信徒たちは「死者の復活などない（死した個々人の魂の永遠の存続はない）」と言っていたのであろう。

それともう一つ、当初のクリスチャンは、自らの生きている内にキリストの再臨があると強く期待し信じていた。そういう者たちにとっては自分の「死後」は想定外であったのであろう。であるから、死した者らの魂の問題は感心事にあらず、「今生きている我らこそ救われるのだ!」と考えていたものと思われる。

それらに対してパウロは、死と魂の救いの問題は、あくまで個々人のことであることを説明する。ここでパウロが説く「死者の復活」とは、何も皆がキリストのごとく墓穴から出てくる、というこの世的現象を指すのではなく、個性の存続、すなわち「わたしはわたし」「あなたはあなた」として、その個性が神の前で取り扱われ、罪の結果としての永遠の滅び（神との断絶）から救われることを指している。そしてそれこそ、「キリストの十字架と復活」が実証してくれたものであり、そこにこそ希望がある。

わたしたちの個性は、死してもなお存続し、その個性として裁かれ、その個性として救われる、それが復活であり、救いである。キリストの復活を信じること、その救いを信じることは、このこと「死者の復活」を信じることと不可避的なものなのである。

そしてパウロは、キリストを「眠りについた人たちの初穂」（15:20）と呼ぶ。ここで「初穂」について考えてみよう。ユダヤ人は、刈り入れの祭の時に穀物の初穂の束を祭司のもとに携えて行った（レビ23:10-11）。そしてその束は神殿に運ばれ、入念に打穀され麦粉となる。この麦粉を神にささげた。この儀式を経れば、新麦を店で売買することも、新粉からパンを作ることも出来なかった。「初穂」は来たる収穫の前兆であった。パウロはこのことと重ね合わせてキリストの復活を「初穂」と呼ぶ。キリストの復活は全信者の復活の予兆である、と。

またパウロは、創世記3章のアダムの墮罪物語を引用し、罪と死の関係、十字架の贖いと復活の関係を説く。罪（死と滅び）が一人の人（アダム）によって決定づけられたのに対し、復活（救い）もまた一人の人（キリスト）によってなるのだ、と。これは先日5/19の礼拝宣教（ローマ5:12-21）で宣べたとおりである。

23 節以降の内容についても押えておこう。パウロは終末における「順序」(15:23) を説きながら、その様相を描写する。ここで私たちは、その終末の様相を映像化する必要はない。パウロがここで言っていることは、全信者の復活(救い)であり、世の終わりにおける父なる神の完全勝利である。

と同時に、パウロが言いたいことがある。それは「この現在はまだその途中段階だ」ということである。ここまで学んだように、コリント教会には、殊更靈性に熱狂し、「この世離れ」していた者たちがいた。その者たちは「すでに」を強調し、「現在」を軽んじた。しかしパウロは言う。「終末(救いの完成)は将来であり、現在はその途上だ」と。「この世における悪の勢力は未だ存し、それとの闘いもまた途上だ」と。

31 節以降がパウロの強いメッセージである。パウロは言う。「わたしは日々死んでいます」(15:31) と。これは「わたしは日々、この世の悪と闘って、死ぬほどの苦難を味わっています」という意味と解する。そしてそれは「もうすでに救われているのだから、この世の生活は No 問題!」と好き勝手に振る舞っているコリント教会の人々との生き方と正反対である。コリント信徒たちは「悪いつきあい」(15:33) とか「正気」(15:34) でない罪を日々犯していたのであろう。「自分自身に恥じなさい!」これがパウロの叱り(メッセージ)であった。

※29 節・30 節の部分は非常に特殊なコリント教会の状況である。ここにあるのは「代理のバプテスマ」である。バプテスマを受けずに死んだ人(特に身内の者)を、救いの恩恵に与らせるためのバプテスマである。死者の復活に全否定的な者たちにとって、現生の生者がなせる救いの執り成しとして行ってほしい。パウロはこれを支持しているわけでは決してない。この儀式を、例の復活否定論者らが行ってほしいから、その矛盾点をパウロはついているのである。「死者の復活を否定しながら、死者のためのバプテスマを行うとは何たる矛盾か!」と。

『聖書教育』より

- 「『初穂』となられたイエスさまに従い、主の業に励みます。主に結ばれているならば、私たちの働きは無駄にならず、実を結ぶのです。」(聖書の学び～眠りについた人たちの初穂)——生涯貫いた信仰の歩みが決して無意ではなく報われる希望、それが「初穂」に込められている。

《分かち合いのために》

- 「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です」(15:19) とある。信仰を単なる処世術、幸せになる方法論と言う人がいる。それならば良い処世術、優れた方法論は他にもあるだろう。良い宗教も数ある。しかし、救いは単なる現世のことではない。永遠の時間を射程に入れた究極の関心事である。そういう意味では、信仰の根幹、「あなたはなぜキリスト教を信じるのか?」という問いを考える最も重要な箇所が、この第一コリント 15 章と言えるかもしれない。